

「大人になれなかった弟たちに……」

七組 読んだ読んだ 第二場面



・「僕」はひもじかったことを理由にしてヒロユキの大切なミルクを盗み飲みして、その結果ヒロユキは死んでしまった。「僕」は責任を感じ、弟の死は絶対忘れてはいけな^いと思った。

三谷楓真

・ヒロユキが死んでしまって、「僕」はお腹がすいてもどれだけひもじくても、がまんすればよかったと後悔したと思います。そして、母が涙を流したことで、「僕」は、自分がしたい^いけないことをこれから忘れられないなど思いました。

岩田 悠

・「僕」はヒロユキの死語、母の言葉に慰められたが、母の涙でそのなぐさめが本心ではないことに気づき、とてつもない罪悪感にさいなまれた。そして、ヒロユキの死は、ひもじかったこととともに、「忘れられないもの」から、「一生忘れないもの」へと変わった。

満仲安紀

・ヒロユキの死に方は、最後の最後までひもじい思いをしていたため、決して幸せとは思えないが、母はそんなヒロユキを「幸せだった。」と言った。それは、わが子の死を必死で受け入れようとするための、自分に言い聞かせる言葉だった。そのとき、「僕」は、弟の甘い甘いミルクを盗み飲んでしまったことを、今までで一番深く後悔した。「僕」はこれらのことを一生忘れず、命を大切にしていきたいと思った。

内木希美

・「僕」は、ヒロユキの死に自分が関わっていることを最初は忘れたかった。でも、母の涙が心に響いて、ひもじかったときに起こったことを忘れてはいけないと心に誓ったのだった。

柴田珠里

・「僕」は、ヒロユキが死んだということを受け止めて、これからはヒロユキの分も生きるために、ひもじかったこととヒロユキの死を、一生忘れずに生きていくんだという決心をした。

後藤佑希

・「僕」は、どうしてヒロユキのミルクを飲んでしまったのかと後悔をしたと思います。それは、ひもじいと思っているのは「僕」だけでなく、ヒロユキたちもだからです。そのせいでヒロユキは死んでしまったから、忘れたくても「僕」が悪いから、忘れないのだと思いました。

杉浦由佳

・ヒロユキがひもじい思いをして死んでしまったことを「僕」は一生忘れないだろう。ヒロユキが死んだとき、母は「ヒロユキは幸せだった。」と言った。しかし、それとは裏腹に、悲しみが深いことが感じられる。「幸せだった。」といった母も、棺に入れるとき、「大きくなったんだ。」と言いながら泣いてしまった。母も「僕」もヒロユキを失ってしまい、自分のせいでと責める結果となってしまった。

大久保咲良

・「僕」は、ヒロユキが死んだことによって、「自分がヒロユキのミルクを飲んでしまったから、ヒロユキは死んでしまった。」という罪悪感が生まれた。それとともに、必死にヒロユキを育ててきた母や、ヒロユキに一度も会うことができなかった父に対しても罪悪感が生まれた。確かに、「僕」はひもじく、貧しかったため、我慢の限界でヒロユキのミルクを飲んだしまったのだが、そのことでヒロユキは死んでしまったため、36段落のように、忘れてはいけな^いと思った。

岩田美咲